

## 『海国図志』の和解本『亜墨利加総記』正編、続編、後編について

阿川 修三

### 一 はじめに

幕末、魏源の『海国図志』が海外事情撰取において大きな役割を果たしたことは既に論じられている<sup>①</sup>ところであるが、それは決して中国から将来された原本が読まれたわけではない。そもそも日本に将来された部数は僅か十九部に過ぎず、且つ大半は幕府の御文庫（紅葉山文庫）、学問所などの幕府関連機関乃至は幕閣の属する藩に蔵されていて、限られた人だけしか読むことができず、評判は呼んでも、多くの読者の用に応えるものではなかった。その結果、その一部が和刻本、和解本という形で出版され、流通し読まれ、当時の海外事情撰取に大きな役割を果

たしたのであった。その中でも、特に和解本がその内容から考えて、その普及に果たした役割は大きいと思われる。この一端は既に別稿で僅かに論じた。<sup>③</sup>本稿ではその和解本の一つである、廣瀬竹庵撰『亜墨利加総記』正編（『亜墨利加総記』、続編（『続亜墨利加総記』）、後編（『亜墨利加総記後編』）を例として、作者の出版意図、和解の方法を中心に検討しながら、アメリカ（アメリカ合衆国、以下同じ）事情撰取でどのような役割を果たしたかを考えていきたい。

## 二 『海国図志』の将来と和刻本、和解本の刊行

『海国図志』は、大庭脩の研究によれば、嘉永四(1851)年に中国渡来船が初めて三部長崎に将来し、三部は全て奉行所を通じて幕府(御文庫、学問所御用、老中牧野備前守忠雅)に買い取られた。翌嘉永五(1852)年にも、中国渡来船が一部将来し、それは、長崎会所預かりとなった。更に、嘉永七(1854)年には、中国渡来船が十五部を将来し、七部が幕府御用となり、他の八部は競売されたという。<sup>(4)</sup>このように、嘉永四年、長崎に中国の貿易船が将来した以降、四年間で日本には十九部将来され、いずれも第二版六十巻本である。<sup>(5)</sup>

この十九部は、既に述べたようにそのほとんどが、御文庫(紅葉山文庫)、学問所などのような幕府関連機関、または幕閣の藩が所有して、見ることが出来る者は限られていた。そこで、和刻本乃至は和解本が出版されるわけであるが、それには一つ乗り越えなければならぬ高いハードルがあった。こ

の『海国図志』は世界の地誌であり、当然ながら、特に欧米の部分にはキリスト教に関する記述があった。キリスト教を厳禁していた当時の日本では、中国から将来される漢籍にも目を光らせ、キリスト教関係の書物の流入を防ごうとしていた。キリスト教に係わるものは、出版は元より、それを所持したり読んだりすることも、厳しく禁じられていたのである。この書物の出版には、当時の当路に在る人々の理解、承認が必須であったのである。

このハードルを外した人物がいる。川路聖謨(1801～1868)である。彼は当時勘定奉行であり、海防掛を兼ねており、開国を求めるロシアとの外交交渉を担当していた。ちょうどその時、『海国図志』を御文庫で読み、この書物の海外事情撰取に有用であることを知った。そこで、時の老中首座阿部正弘(1819～1857)の裁可を得、『海国図志』から、「普魯海(海防)篇」、「俄羅斯(ロシア)」、「普魯社(ロシア)」、「英吉利(イギリス)」を選び、校訂、訓点を塩谷宕陰(名は世弘、1824～1867)に、欧米

の地名、人名の読みを箕作元甫に命じて、自費で和刻本を刊行し、要路の人に配っていた。<sup>66</sup> そのあたり  
の事情を、塩谷右陰が次のように述べている。

此の書（『海国図志』）客歳（昨年）清商の始めて  
舶載する所と為る。左衛門尉川路君之を獲て、  
其れ有用の書なりと謂う。命じて亟に翻栞せしむ。  
【塩谷世弘「海国図志」を翻栞するの序」、原文  
は漢文、括弧の中は筆者が補った】

川路がこの当時ペリーの来航で騒然な中、墨利加  
洲（アメリカ）部の訓点等を両名に命じなかった  
のは、既にその作業が河田迪齋（1806～1839）の  
手で進められていた<sup>67</sup>ことを知っていたからである  
う。実際河田迪齋の手になる、名義は、下総の豪農  
中山伝右衛門の和刻本『墨利加洲部』は、塩谷等最  
初の和刻本『海国図志 籌海篇』とほぼ同時期の嘉  
永七年七月に刊行された。河田は当時ペリーとの外  
交交渉に幕府代表として携わっていた大学頭林復齋  
（1800～1859）の側近（林家塾頭）として、実際日  
米修好条約の起草をした人物でその外交交渉の相手

国であるアメリカの情報を入手すべく、アメリカを  
含む南北米大陸の部分の和刻本『墨利加洲部』を刊  
行したのであった。

当時、刊行された『海国図志』の和刻本は既に萃  
げた五点のほかは、頼山陽の三男で安政の大獄で刑  
死した勤王の志士、頼三樹三郎（1825～1839）の  
訓点による『海国図志印度部』のみで、総計六点で  
ある。

さて、これまで、『海国図志』の日本への将来、  
その後のその和刻本刊行について簡単に述べてき  
たが、ここで、『海国図志』の書物の成立、そして、  
その書物としての特徴を触れておく。このことは幕  
末においてこの書物が海外事情摂取に大きな役割を  
果たしたことに大いに係わるからである。『亜墨利  
加総記』の著者、廣瀬竹庵が同書正編の冒頭で述べ  
る如く、『海国図志』は「歐羅巴人ノ原撰ニシテ清  
ノ林則徐ノ翻譯ナリシヲ其後魏源重子テ輯録セシ海  
国図志」とあるように、林則徐から託された『四  
洲志』Hugh Murray（慕瑞）『The Encyclopedia

of Geography (世界地理大全』(1834)を林則徐が梁進徳に命じて漢文に抄訳させたもの』を藍本とし、それに魏源が漢訳洋書(来華宣教師が漢文で著した西学書)や正史などの引用により補ったものである。編集は魏源の手になるが、彼自身『海国図志』の序で述べるように「何以異於昔人海国之書、曰、彼皆以中土人譚西洋、此則以西洋人譚西洋」であり、『海国図志』とは『四洲志』をベースとし、西洋人の手になる、『漢訳洋書』の抜粹を加えた世界地理書で、資料は西洋人のものである。和刻本を校訂した塩谷世弘も「従前、漢人、華を以て自居し、外蕃を視て、啻だ犬家のみならず。其の地理政治に瞽として瞽矇の器を摸るが如し。間に異国図志、西域聞見録、八紘訳史、荒史の類あるも、大率荒唐無稽の談にして、微とするに足る者鮮し。此の編(『海国図志』)は則ち欧人の撰に原づく。実を取りて信を伝ふ。(塩谷世弘『和刻本 海国図志 籌海篇』「翻栞『海国図志』序」(嘉永七年六月)原文は漢文)」と言い、西洋人の資料に基づくもので、旧

来の中国の荒唐無稽な世界地理書と違い、信頼がでさる書物として評価している。以上の理由から『海国図志』は海外事情撰取に有用な書とされたのである。では当時、海外事情撰取になぜ漢籍を読むのかということになるが、それは当時の日本人のリテラシーと大きく係わる。当時の日本で欧米の言語に通じていたものは知識人のごく一部にすぎないという状況であり、識字層の大半にとって漢籍は身近なものであったのである。

『海国図志』には、既に述べたように、日本ではその一部が、和刻本、和解本という形で出版された。ここで言う和刻本とは、原文を翻刻するだけではなく、その上に訓点を付し、欧米の地名・人名などに読みをふりがなで付けたものである。一方、和解本とは、原文を和解、即ち和語で解釈したものであり、今日で言う、翻訳とでも言うものであった。和解本が具体的にどういうものかは、後に述べることにする。なお和解本は十四点刊行されている。その和解本のうち最も多いのが、アメリカ(アメリカ合衆国、

以下同じ)の部分と和解したものであり、それは和解本の刊行が、ペリー来航による砲艦外交が展開された時期と重なり、アメリカへの関心が一際高かったからである。アメリカの部分の和解本には、廣瀬竹庵のもの以外に、正木篤『墨利加(アメリカ)洲沿革総説補輯和解』一冊【安政二(1855)年正月】同『美理哥国総記和解』上中下【嘉永七(1854)年夏】、皇国隠士『新国(アメリカのこと)圖志通解』【嘉永七(1854)年】がある。

では、次に廣瀬竹庵『亜墨利加総記』正編、続編、後編について論ずることとする。

### 三 『亜墨利加総記』の刊行時期とその内容

『亜墨利加総記』は正編、続編、後編の六巻五冊からなる。先ずはその刊行時期、『海国図志』のどの部分からの和解なのかを示す。なお、刊行時期は見返し、扉や奥付にある刊行年月に基づき、併せてそれらの書物の出版申請、許可の資料(『市中取

締続類集』「書籍之部」<sup>(9)</sup>にある許可の年月も括弧内に参考に示す。

『亜墨利加総記』一巻一冊 嘉永七(1854)年甲寅初夏(同年七月許可)

『海国図志』(60巻本)「卷三十九第七葉裏の「弥利堅即美理哥国総記」上の最初から第二十三葉表第三行までを和解する。巻頭に藤森大雅「重訳美利哥総記序」、廣瀬竹庵「墨米利加総記叙」、巻末に横山湖山の跋文がある。

『続亜墨利加総記』二巻二冊 嘉永七(1854)年甲寅閏(七)月(同年九月許可)

一冊目は巻一、『海国図志』(60巻本)「卷三十九」(「外大西洋」墨利加洲総叙)、高理文(ブリッジマン)「原志」(「美理哥合省国志略」)序に訓点、外国の地名・人名にはルビを付け、卷三十九「弥利堅即美理哥国総記」上の第二十三葉第四行から最後までを和解する。二冊目は巻二、「弥利堅国総

記」下を和解する。

『亜墨利加総記後編』三巻二冊 安政乙卯（1855）年初夏（同年正月）

一冊目は巻頭に本書目次があり、その後に『海国図志（60巻本）』巻四十「弥利堅国東路二十部」前半を和解。二冊目は、巻二には、巻四十後半、巻三には巻四十一「弥利堅国西路十一部」を和解する。

なお、この『亜墨利加総記』正編、続編、後編には、題簽が『通俗海国図志』という異本が存在する。内容はほぼ同じではあるが、横山湖山の跋が後編の第二冊の最後にある。ここでは指摘にとどめておく。

この三編の収録内容は、『海国図志』「墨利加洲」のうち「墨利加洲総説」を除く、「弥利堅国総記上」「弥利堅国総記下」「弥利堅国東路二十部」「弥利堅国西路十一部」である。「弥利堅国総記上」は、『美理哥（合省）国志略』の「上帙」の抜粋であり、アメリカの地球上の位置から始まり、アメリカ独立に

いたる歴史から自然、産業、政治、社会などに至るまでアメリカ全般の抜粋であるが、原文と対照してみると、忠実な抜粋ではなく、一部を省略したり、表現を一部変えたりして、原文にかなり手を入れている。「弥利堅国総記下」は林則徐が翻訳させた『四洲志』であり、アメリカ歴史、地誌が記されている。「弥利堅国総記上」、「弥利堅国総記下」には、重複する部分もある。「弥利堅国東路二十部」は東部の二十部（州）を部ごとに『四洲志』の該当部分を最初に置き、その後に『美理哥国志略』のその部からの抜粋で補う。「弥利堅国西路十一部」も西部の十一部（州）を同様に『四洲志』の該当部分と、『美理哥国志略』各部（州）からの抜粋で補う。『亜墨利加総記』三編を読めば、アメリカの自然、歴史、政治、社会等及び各州の地誌に至るまでの大要を知ることができることになる。「墨利理哥洲部」は当時アメリカを知る上で有用な書物であったのである。

#### 四 『亜墨利加総記』の出版意図

『海国図志』には和刻本があるにもかかわらず、なぜ和解本を著すのか。和刻本には訓点は付いているが、それなりの漢文読解能力と西洋についての初歩的知識を必要とする。それに対して、和解本はその原文を和解するので、それほどのリテラシーを有していない者にもわかるものであり、且つわかるものでなければならぬ。和解することにより、読む階層が大きく広がることになる。

和解本作成には作成者のかなりの学識が必要になる。その上、この和解、言わば現在の翻訳に近いものであるが、それは当時雑著扱いであり、業績として評価されるものではなかった。ならば、廣瀬はなぜそのような労多くして功少ない仕事を敢えてしたのだろうか。廣瀬の自序「亜墨利加総記叙」にはその理由が次のように記されている。

今之夷狄非古之夷狄也。而世人不察、傲然輕視

之以不為意、具粗知其情勢者爾然生恐怖之心、而不知所以為備焉。夫能使人審彼之情勢、知可畏而不可怖者是讀書人之任也。顧余非其人耳。然頃者讀清人林則徐海國圖志得詳兼攝國建立之本末有所感焉。支兼攝國旧係英夷之屬地而一旦不忍其貪虐於著會議立注申頓為之將帥、遂逐英夷終為獨立不羈之國者七十餘年、……故余就圖志中以國字詠弼利堅總記能使世人知彼之情勢可畏不可怖而為之備爾。

嘉永甲寅仲夏

竹庵字人達撰

結論から言えば、読書人としての使命感である。それは以下に述べる現状への危機感から生まれている。当時、世の多くの人々が、西洋を中国伝来の華夷思想により、単なる夷狄（野蛮人）と思ひ込み、「傲然輕視之、以不為意」（軽んじて意に介さない）という状態であった。また一方、多少とも情勢を理解している者は逆に、「生恐怖之心」（恐怖心のみ生じ）「不知所以為備焉」（海防などの備えの必要性が



理解できない) という状況であり、彼はそれを憂慮していたのである。当時日本に來航していたペリーの砲艦外交をはじめとする西洋列強の脅威に対抗するには、彼は「顧余非其人耳(私はその任には堪えない)」としながらも、「就図志中以国字訳弥利堅総記能使世人知彼之情勢可畏不可怖而為之備爾(『海国図志』から「弥利堅総記」を日本語に訳して、世の人にアメリカの現状を知り、その力の畏るべきではあるが、海防などの備えをすれば、怖れる必要はないことを知らしめようとした)」のである。ここで言う「世人」とは、当時実際に政治を取り仕切っていた上層の武士のみならず、武士身分としてその最低辺にある「武夫」もこれに含んでいる。この点については藤森大雅、横山湖山が序、跋で明確に述べている。この点は後で触れる。

松本三之介がこの当時の思想状況を次のように述べている。「幕末における対外意識の高揚は、外国に対する意識の反射として幕府と諸藩という立場の違いを超えた拳国的利害の共通性と一体性を人びと

に自覚させ、また貴賤尊卑という身分の相違を超えた問題関心の共有が、ここに新しく期待されることとなる。日本の新しいナショナルな集団意識は、こうした過程のなかでその形を整えていくのである」【増補明治思想史】(以文社 2018)「維新前夜の思想」p.12 廣瀬が和解本を作成し、百姓、町人までは含まなくとも広範な人々に対外的危機意識及びその対処について共有させようとするのも、また、藤森、横山がその志を讀えるのも、このような当時の思想状況によるのであった。

廣瀬以外の和解本の作成者、例えば大槻西禎(1818～1857、字は瑞卿。昌平黌に学び、各国史や世界地理を紹介して海防論を説いた。『講談社日本人名大辞典』も「独り武夫俗吏の遽かに解す能はざるを惜しむ。此の拳(和解本を作成した)所以なり(『海国図志夷情備采』序、原文は漢文)」、「武夫俗辺疆の責に任ずる者は之を熟読しその情を得ば、則ち戦ふに以てその鋭を挫き、款するに以てその命を制さん(和解本『俄羅斯総記』の序、原文は漢



文」とあるように、廣瀬と同様な使命感をもって和解本を作成していたのである。序などで見る限り、その他の和解本作成者も大体同様である。<sup>①</sup>

次に廣瀬の対外観について、少し触れておく。自序にある「今之夷狄非古之夷狄也」がそれを解く鍵である。日本は古代以来、中国の世界観である華夷思想の枠の中にあり、中国の文化・学問は絶対的な優位性を保持していた。ところが江戸時代に入ると、日本独自の儒教、例えば伊藤仁斎の古学、山崎闇斎の崎門派等の登場や、国学の誕生により、華夷思想に支えられていた、儒教を中心とする中国文化・学問の絶対的優位性が相対化されて揺らぎ始めた。江戸時代も後期になると、更に蘭学の誕生により、西洋の医学や科学などの西洋の学問が移入され、その傾向には拍車がかかった。アヘン戦争による衝撃によりその枠自体が崩れ始めることになる。廣瀬竹庵は、蘭学者として、西洋の医学や科学を学ぶ中で、「今之夷狄非古之夷狄也」とあるように、彼の中で、既に中国文化の絶対的な優位性は崩れており、

西洋文化に対してもある程度の価値を置いていることが考えられる。そのことは次に論ずる和解において、今で言う「中国」の訳語に「支那」を選んでいくところからも推察される。

廣瀬竹庵については、管見のところ、僅かに次のような経歴が分かるのみである。名は可行、字は達、号は竹庵、蘭学に詳しく稲葉長門守（正邦）山城流藩家来を経て、高松藩藩儒、藩校講道館洋学教授（『市中取締類集』「書籍之部」、『国書人名辞典』（岩波書店、1993～1999））。その経歴で分かるように廣瀬には蘭学の造詣があり、それは『亞墨利加総記』の和解にも生かされているように思う。この点は後で述べる。

次に藤森大雅「重訳美利哥総記の序」を見ると

財貨不聚、非国之貧也。人材不足之謂貧、兵甲不多、非国之贏也、士氣不競之謂贏、国貧且贏、則外侮必至。……美利哥国、開創之初、不忍英人凌虐、衿者会議、立華盛頓、為主帥、條列英人之

罪、檄告各国、終攘斥英人、為獨立国。余嘗聞之。深嘉其得禦侮之要。然世之訳西書者、不察彼此語勢有異、過泥原文辭贅轄、使読者悶々。此書原係清人林則徐所訳。廣瀬可行、更用邦語重訳之。通暢平正、於当日事情炳然如觀火。雖武夫読之、亦通曉。夫使人通曉禦侮之要者、当世之急務也。執柯以伐柯、睨而視之。可行重訳之意、其在於此乎。因為書其卷端。

嘉永七年龍集甲寅夏四月

江都弘庵居士藤森大雅識

藤森は『亜墨利加総記』は、アメリカがイギリスの蹂躪を撥ねのけ、獨立国となつた記録でもあり、それを廣瀬が邦語（日本語）で訳したことは、「夫使人通曉禦侮之要者」即ち外国に侮りを受けないようにする要点を世の人に知らしめることで、これは当世の急務であるとしている。その上、廣瀬は、これまでの西学書（西洋に関わる書物）の翻訳の通弊と藤森が考える、「不察彼此語勢有異、過泥原文辭

義贅轄、使読者悶々」即ち、原語に拘泥するあまり、大変読みにくいのと異なり、「通暢平正、於当日事情炳然如觀火。雖武夫読之、亦通曉」即ち、平易な言葉に訳して、その内容が火を見るように明らかで、あまり教養がない武夫ですらこれを読めば理解できると言い、廣瀬の訳業の意義を評価するとともに、且つその訳文のわかりやすさを賞めている。

次に横山湖山の跋を読むと

吾友廣瀬可行慷慨士也。窃見近時夷蛮之情状、自思為国奮而進取、無語有志而不乃展。於是欲責之於人、謂士者所以審形勢出方略也。使人具有為之志莫過書焉。故苟有其：於外夷、補於守備者、每方搜索網羅無遺、欲以伝具人。『海国図誌』者、清人林則徐所撰、舶載極少。深藏於秘府、人皆思一見、而不能得。可行獨得偷見之、有手抄、乃批訳此卷、一也。是亦：以見其用意之所在矣。設使読者徒喜其新奇取以為話柄、而不能具有為之志、則豈可行之意哉、豈可行之意哉。

嘉永甲寅肇春

湖山迂人題

横山湖山は廣瀬を「慷慨士」とし、この書物の刊行が「窃見近時夷蛮之情状、自思為国奮而進取」即ち、近年の夷蛮（欧米）の開国を求める来航に触発され、国の為に奮闘した結果として、秘府（幕府関連施設）にししか所蔵されず、読むことの困難な『海国図志』を「独得偷見之、有手抄、乃沢訳此卷（どうにか盗み読みして、それを書き写し、翻訳を行った）」、とその行為を讃えている。以上見るに、廣瀬が和解本を著す意図は、漢文の素養や蘭学の素養がない人々に、アメリカの現状を理解させ、アメリカの砲艦外交に怖れるのではなく、それに対応する備えの必要なことを知らしめようとしているのであると、横山は考えている。

以上のように、いずれの序も、跋も、和解本の作者の廣瀬の、武夫にも日本の危急存亡の危機とその対処法を知らしめようとする志を嘉し、併せて、その訳業の意義を述べ、それこそが当世の急務とし

ているのである。

なお、序、跋を書いた、藤森大雅、横山湖山は当時からかなりの著名人である。序文を書いた、藤森大雅（1799～1862）は、名を弘庵と言ひ、儒者で小野藩侍講、土浦藩藩校教授を経て、江戸で塾を開く。勤王の志士と交わり、「海防備論」を著し、安政の大獄では江戸追放処分となる（『講談社日本人名大辞典』2001）。跋文の横山（小野）湖山（1814～1910）は明治期まで活躍した著名な漢詩人。梁川星巖、藤森弘庵に師事し、藤田幽谷と交わり、安政の大獄で蟄居処分を受ける（『講談社日本人名大辞典』2001）。

廣瀬竹庵と藤森、横山との関係については、その序や跋を読む限り、危急存亡になる日本をどうにかして救いたいという問題意識、つまり憂国の志を共有しているようで、ある意味の同志という関係であろうか。現在のところ確たる証拠はない。今後の調査に待ちたい。

## 五 『亜墨利加総記』の和解の特徴

既に述べたように、藤森大雅はこの本の序で、廣瀨の和解について、「更用邦語重訳之。通暢平正、於当日事情炳然如觀火。雖武夫読之、亦通曉」と述べ、従来の西書（西洋書）の翻訳が原語に拘泥して大変読みにくかったのに比べ、廣瀨の訳は「通暢平正（一気に読めて、わかりやすく正確であり）、リテラシーのそれほど高くない「武夫」ですらこれを読めば理解できると評価している。筆者も廣瀨の和解を読んで、藤森の「通暢平正」は、この書物の大きな特徴の一つであると思う。

それでは、これから、「通暢平正」である廣瀨の和解の特徴について考えていきたい。

まず、本書は中国でできた書物のために、中国の年号が用いられている。廣瀨はこの書物の冒頭で「原書ニハ清朝ノ年号ヲ用ユ今替ユルニ皇朝ノ年号ヲ用ユルモノハ覽ル者ニ便ナラシメンカ為ナリ」（『亜墨利加総記』本文冒頭）と述べ、和解において、

日本の年号に直している。ただそれは単に「便ナラシメンカ為ナリ」だけが理由ではないように思われる。和解するのに中国の年号を残す必要はないという彼の考えによるものと思う。廣瀨竹庵はこの和解本で中国の訳語として「支那」を選んでいるが、そのことと大いに係わる。後で詳しく述べることにする。

同時期に刊行された、他のアメリカの部分の和解本、例えば正木篤『美理哥国総記和解』では、「明の万暦年間に迫んで中英美等年」とし、皇国隠士『新国志通解』でも、「明の泰昌年間廣瀨中」とし、本文ではなく、中国の年号の下に、割り注で日本の年号を入れている。廣瀨のように、本文の中国の年号を日本の年号に変えた方が確かに読みやすい。

次に『海国図志』の和刻でも和解でも、大変厄介なのが、漢訳の西洋の地名、人名などになかで読みをつけることである。『海国図志』の和刻本の作成者である塩谷世弘は「海国図誌二編（『俄羅斯国』、『普魯社国』）ハ未ダ不成、乍去不遠公世可仕由二御

座候。塩谷先生ノ話ニ、句点ハ易ケレトモ、地名、人名等ニ纂作ノカナ付ノ分、大ニ六ヶ敷由ニテ、手間取困却之由、是又尤之事ニ御座候也」【宮地正人編『幕末維新風雲通信』（東京大学出版会 1978）P.109】と坪井信良に述べている。当代随一の洋学者箕作阮甫を以てしても困難を極めた作業であったわけだが、『亜墨利加総記』の場合ほどのようにしたのであるうか。

この書物の漢訳地名、人名の読みについて、考察する前にその関連で、まず和刻本『墨利加洲部』（以下和刻本と略称）と和解本『亜墨利加総記』（以下和解本と略称）の関係について述べる。和刻本は奥付によれば「嘉永七年庚寅 四月」とあるが、実は出版申請書類『市中取締続類集』『書籍之部』によれば、出版の許可は同年七月である。一方和解本は正編がその見返しに「嘉永甲寅初夏新刊」とあり、続編がその扉に「嘉永七（1854）年甲寅閏（七）月」とあるが、『市中取締続類集』『書籍之部』によれば、正編は同年三月に学問所改済みであり、続編

は同年七月に学問所改済みであり、和解本作成時には、和刻本を参考にすることができない。和刻本の漢訳の地名、人名の読みを参考にできないのみならず、和解本の元とする本文自体も別に求めなければならぬ。これについては、横山湖山が跋で「可行独得儉見之、有手抄、乃択訳此卷」とあり、独自のルートから入手したようである。となれば、廣瀬は独自に漢訳の地名、人名に読みをつけたことになる。では、次に、廣瀬がこの書物で、漢訳のアメリカの地名、人名の読みをどのようにつけたかを見ていこう。

まずは和解本に登場する州名の読みについて、和刻本の読みと、順に比較をしてみることにする。先ず漢訳の州名とその下の括弧内にその英語表記を示し、その次に、和刻本（刻と略す）の読み、和解本（解と略す）の読みを順に示す。その語自体がない場合は「語なし」と記す。

費治弥亜 (Virginia)

- 刻 ヒルギニヤ 解 ヒルギニヤ
- 馬沙雪些 (Massachusetts)
- 刻 マッサキセッツ 解 マッサニセツ
- 新韓賽 (New Hampshire)
- 刻 ニーウハムフシン 解 ハンプシン (新にルビ無)
- 羅底島 (Rhode Island)
- 刻 ローデイス (島にはルビなし) 解 ローデイスラ  
ンド
- 新約基 (New York)
- 刻 ニーウヨルク 解 子ウヨルク (子はネの変体仮名)
- 新遮些 (New Jersey)
- 刻 子ウエルセイ 解 子ウエルセイ
- 底拉華 (Delaware)
- 刻 テラワレ 解 テラワレ
- 辺西耳文 (Pennsylvania)
- 刻 ペンセイルハニア 解 ペンセールフアニー
- 馬理蘭 (Maryland)
- 刻 マレイランド 解 マレイランド
- 南駕羅連 (South Carolina)
- 刻 ソイドカロニナ 解 ソイトカロニナ
- 北駕羅連 (North Carolina)
- 刻 ノードルカロニナ 解 ノールドカロニナ
- 磋治亜 (Georgia)
- 刻 ケラルキア 解 ゲラルニキア
- 干尼底吉 (Connecticut)
- 刻 コン子クチキュト 解 コン子クチキュツト
- 華満部 (Vermont)
- 刻 フルモント 解 フルモント
- 建大基部 (Kentucky)
- 刻 ケンチュケイ 解 ケンチュケイ
- 典尼西部 (Tennessee)
- 刻 テン子ツセノ 解 テンニス
- 阿嘻阿部 (Ohio)
- 刻 オヒオ 解 ライヲ
- 累斯安部 (Louisiana)
- 刻 ロイシアナ 解 ロイシアナ

- 引底安部 (Indiana) 解 インチアナ  
 刻 インチアナ 解 インチアナ  
 美士細比 (Mississippi) 解 ミスシスシッピ  
 刻 ミツツシツヒ 解 ミスシスシッピ  
 伊理奈 (Illinois) 解 イルリノイス  
 刻 イルリノイス 解 イルリノイス  
 亞喇罷麻 (Alabama) 解 アラビマ  
 刻 アラビマ 解 語なし  
 緬部 (Maine) 解 メイ子  
 刻 メイ子 解 マイ子  
 美蘇里 (Missouri) 解 ミツソウリ  
 刻 ミツソウリ 解 ミツソウリ  
 阿干蘇 (Arkansas) 解 ルカンサス  
 刻 ルカンサス 解 アルカンサス  
 美是干 (Michigan) 解 ミシカン  
 刻 ミシカン 解 ミシカン
- 読みは全く同じものもあるし、近いが微妙に違うものもあるが、大きな違いはあまりない。和刻本の

実質的作成者である河田迪齋は高名な儒学者ではあるが、蘭学の素養がないので、漢訳地名などの読みは、必要と思われる最低限度のものを専門家に依頼した可能性が高いと思われる。そのため和刻本には、漢訳の地名のみならず、人名にも読みが振っていないものが多い。廣瀬はその経歴から蘭学者でもあり、オランダ語のアメリカ地誌の書物の原語から読みをつけたものと思われる。河田の依頼した専門家もそうしたのであろうから、読みにも若干の違いがあるのは当然ではある。当時、この方面で参考となる書物は箕作省吾（箕作阮甫の女婿）の著した『坤輿図識』くらいである。この世界地理書の巻四下のアメリカの地誌、「共和政治総説」にアメリカの三十州がカタカナで記されている。これと既に掲げた州名の和訳本の読みを比べると、十州は全く同じ、それ以外もかなり近いものがある。これはこの書物を参考にしたというより、結果として一致したものと思われる。つまりこれは廣瀬の蘭学の力の高いことを示すものであろう。



『亜墨利加総記』の冒頭の部分に「歴瀾的海」とう海の名前が出てくる。これは「大西洋」のことで、当時日本の西洋の学問は蘭学が主流である。オランダ語では「Atlantische Ocean」である。そのカタカナ読みは「Ocean」を除くと「アランティセ」となる。和刻本では「アラテ」、和解本では「アタランテ」とルビが振ってあり、廣瀬の方が音訳として正確である。これにも廣瀬の蘭学の能力の高さの一端が示されているよう。

続いて、漢訳人名の読みについて、大統領を例に見ていく。和刻本では初代の華盛頓 (George Washington) に「ワシントン」と読みがあるだけであるが、それに対して、和解本では第二代の阿丹士 (John Adams) には「アータムス」、第三代の遮費遜 (Thomas Jefferson) には「エツビルソン」、第四代の馬底遜 (James Madison) には「マヂソン」、第五代の満羅 (James Monroe) には「モンルー」、第六代の阿丹士之子 (John Quincy Adams) には「アータムシス」、第七代の查其遜

(Andrew Jackson) には「ヤクソン」、第八代の泛標倫 (Martin Van Buren) には「ハンビュレン」と読みを付けている。第六代以外はほぼ正確である。以上のように廣瀬はこの書物で、蘭学の能力を駆使して、漢訳地名、人名の読みを懸命に付けていることがわかる。

次に蘭学の素養（基本的な自然科学の知識）のないう人にわかりにくい部分をどう和解したかを見てみよう。次に挙げるのは、『亜墨利加総記』冒頭の部分で、アメリカの位置を緯度と経度で示し、併せて中国と比較したものである。自然科学になじみのない当時の普通の日本人にとって、そもそも地球が球体であり、その地球のある場所の位置を緯度と経度とで示すこと自体、理解しづらいものと思われる。それを廣瀬は次のように和解している。和刻本の該当箇所ともに示す。

和刻本

美理哥国志略ニ曰圜地周圍三百六十度、以テ<sub>レ</sub>天ヲ測<sub>レ</sub>地ヲ、則美理哥地。屬<sub>ス</sub>ニ七十餘度<sub>ニ</sub>、中国<sub>モ</sub>亦

屬スニ七十餘度一。若シ以テニ南北圜地ヲニ而計ル、周圍モ亦三百六十度、内三十餘度、美理哥国、三十餘度、屬スニ中国ニ一。中国之京城、與ニ北極ニ相去ル不レ過ニ五十二度ニ一、而美理哥国之都城、與ニ北極ニ相去ル、亦不レ過ニ五十二度ニ一。所シレ以ニ美理哥国之北甚ツ寒キ一、而中国之北モ亦然リ。自リニ赤道ニ至ルニ中国之南ニ一、相去ル不レ過ニ二十度ニ一、而美理哥之南至ルニ赤道ニ一、亦不レ過ニ相去ルニ十九度ニ一。中国之東有ニ大洋一、而美理哥之東モ亦然リ。可レ知ニ二地東南北皆ナ無キヲレ異ナル。惟中国之西、皆ナ列国為ニ交界ヲ一、而美理哥西、則茫茫無シレ際焉。美理哥北有ニ英吉利附庸之國一、南有ニ墨息哥料與墨息即墨西哥亦作墨疑可一、東有ニ壓瀾アラテの海一、西有ニ太平洋一、然ルニ以テ普天ノ下ヲ一分テ為シニ二十一分ト一、而兼攝邦国僅ニ屬スニ一分ニ一矣。

和解本

亞墨利加国志略曰全地球ノ周圍三百六十度ナリ天ノ度ヲ以テ地ヲ測量スレハ亞墨利加ノ地ハ七十餘度ニ屬ス支那モ亦七十餘度ニ屬ス若シ又地球南北ノ圍地ヲ以テ計レハ周圍モ亦三百六十度ソノ内三十餘度

ハ亞墨利加国ニ屬シ三十餘度ハ支那ニ屬ス支那ノ京城北極ヲ相ヒ去ルニ五十度ニ過ニス亞墨利加国ノ都城モ亦北極ト相ヒ去ルニ五十二度ニ過ギズ是レ亞墨利加国ノ北方ハ甚寒クシテ支那ノ北辺モ亦寒氣甚キ所以ナリ赤道ヨリ支那ノ南ニ至リ相ヒ去ルニ二十度ニ過ニス亞墨利加ノ南モ赤道ニ至ルニ二十九度ニ過ニス。支那ノ東ハ茫茫タル大洋ナリ亞墨利加ノ東モ亦渺々タル大海ナリ東南北ハ皆ト亞墨利加ノ異ナルヲ無キヲ知ルヘシ只支那ノ西ハ歐羅巴ノ諸国へ地続キナリ亞墨利加ノ西ハ茫然トシテ限り無キ大洋ナリ亞墨利加ノ北ニ英吉利ノ領分アリ南ニ墨是可国アリ東ニ壓瀾アラテの海アリ西ニ太平洋アリ蓋シ全世界ヲ分ケテ二十一分ト為シ合衆国ハ僅ニ其二一分ナリ。

最初の部分「圍地周圍三百六十度、以テ天ヲ測ル地」は、特に原語そのままでは理解が難しい。廣瀬竹庵は「全地球ノ周圍三百六十度ナリ天ノ度ヲ以テ地ヲ測量スレハ」と和解している。「圍地」を「地球」に置き替え、「天」を「天の度（緯度、経

度」に置き替え、「測<sup>ル</sup>地<sup>ヲ</sup>」を「地を測量すれば」と言葉を補うことによつて、少しでも分かり易いように工夫をしている。漢籍の和解はやもすると、漢文書き下し調になりがちではあるが、ここの廣瀬竹庵の和解を見ると、今で言う翻訳に近いものになっている。

また、この箇所では、アメリカを示す「美理哥国」や、原語の「中国」を、単にルビを振るのでなく、訳語である「亜墨利加」、「支那」に置きかえて、「亜墨利加」の右側には「アメリカ」と、「支那」の左側に「カラ」とルビを付けている。アメリカに音訳語の「亜墨利加」を用いたのはよいとして、なぜ中国は「中国」ではなく、「支那」でなければならぬのか。これは廣瀬竹庵の中国に対するスタンスの表れと言つてよい。当時、日本では、中国を、普通、かなでは、「から」と書き、漢字では普通、「唐国」、「漢国」と書き、中国の文化・学問の優位性を認めれば、「中華」とするはずである。廣瀬竹庵はなぜ中国の訳語に「支那」を選んだのか、これには

それなりの考えがあったからだと思われる。

渡辺浩は「蘭学者たちは、こうして儒学的意識を持ちつつ、直接に学ぶ相手を「中華」から西洋に切り換えた。したがつて彼らはもう大陸を「中華」すなわち世界の中心とは呼べなかつた。そして、その呼称自体をオランダ語から採り入れた。「支那」である」【渡辺浩『日本政治思想史』（東京大学出版会 2010）P.349～350】

と言う。蘭学者でもある廣瀬竹庵が「支那」を訳語として選んだのはこのような背景があつたものと考えられる。

更に、廣瀬竹庵の和解について、その例に即して、その方法がどのようなものであるか、検討していこう。

和刻本

原<sup>ト</sup>夫<sup>レ</sup>創国<sup>之</sup>始<sup>メ</sup>。即<sup>チ</sup>有<sup>リ</sup>伊大里。法蘭西。西班牙。英吉利。荷蘭等ノ国人<sup>一</sup>。①迢遞<sup>メ</sup>而至<sup>リ</sup>。貿易<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>。今<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>過<sup>キ</sup>二三四百年<sup>ニ</sup>。外国ノ至ル者<sup>モ</sup>亦年<sup>ニ</sup>來<sup>リ</sup>年<sup>ニ</sup>返<sup>ル</sup>。後見<sup>テ</sup>其無<sup>ク</sup>二国主<sup>一</sup>。民散<sup>ク</sup>俗樸<sup>ナル</sup>上<sup>ニ</sup>。

無シレ不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>奪<sub>ラ</sub>其土地ヲ。②適<sub>ク</sub>値<sub>ヒ</sub>年荒<sub>ル</sub>ニ。民多<sub>ク</sub>就<sub>ニ</sub>食<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>別国<sub>ニ</sub>。勢益<sub>ク</sub>渙散<sub>ス</sub>。③各国遂<sub>ニ</sub>加<sub>ル</sub>レ之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>師旅<sub>ヲ</sub>。新国不<sub>レ</sub>能<sub>ハ</sub>自立<sub>スル</sub>。和解本

夫ノ開国ノ始ヲ原スルニ伊太里、<sup>イタリヤ</sup>法蘭西、<sup>フランス</sup>西班牙、<sup>イスパヤ</sup>英吉利、<sup>イギリス</sup>荷蘭等ノ国人年々至テ交易ヲナス其後チ其国ニ国主タル者無く人民散居シテ風俗朴実ナルヲ見込ンテ人々其土地ヲ奪フヲ欲セサルモノ無シ或ル年饑饉ニ逢ヒ其人民多ク他国ヘ立チ去リ国勢イヨク散渙シテ遂ニ各国ヨリ兵船ヲサシムケ其国ハ自立スルヲ能ハサルナリ

和刻本の傍線の部分①から③は和刻本の原語だけ読んだら、意味のわかりにくい箇所である。廣瀬竹庵はそれをわかりやすいように和訳している。以下、原文と和訳を並べて、比較すると、

① 迢遞<sub>メ</sub>而至<sub>リ</sub>。貿易至<sub>リ</sub>今<sub>ニ</sub>。

年々至テ交易ヲナス

② 適<sub>ク</sub>値<sub>ヒ</sub>年荒<sub>スル</sub>ニ。民多<sub>ク</sub>就<sub>ニ</sub>食<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>別国<sub>ニ</sub>。

或ル年饑饉ニ逢ヒ其人民多ク他国ヘ立チ去リ

③ 各国遂<sub>ニ</sub>加<sub>ル</sub>レ之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>師旅<sub>ヲ</sub>

各国ヨリ兵船ヲサシムケ

①では、和刻本の難解な語「迢遞」が和訳では、「年々」に替えられ、和刻本の、当時日本ではあまり使われていなかった「貿易」を、和訳では当時よく使われていた「交易」に替えている。

②では、和刻本の分かりにくい語「年荒」を「饑饉」に替え、「就<sub>ニ</sub>食<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>別国<sub>ニ</sub>」を「他国ヘ立チ去リ」と、言い換えている。

③では「加<sub>ル</sub>レ之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>師旅<sub>ヲ</sub>」という漢文の分かりにくい表現を「兵船ヲサシムケ」と言い換えて、意味を明瞭にしているのである。このように、廣瀬竹庵は、和訳では、難解な言葉をわかりやすい言葉に、当時日本語としてはあまり使われない言葉をよく使われている言葉に替えた。また、全体の意味がよくわかるように原文を言い換えてもいる。ここに挙げた例からみると、廣瀬竹庵の和訳は、先程確認した、今日で言う、翻訳になっているのである。

次に他の和訳の例も見ていこう。

和刻本

①美理哥出<sup>テ</sup>商スル<sup>ニ</sup>外国<sup>ニ</sup>者。其始極<sup>テ</sup>少シ。今已蕃盛ス。乾隆五十五年②共<sup>ニ</sup>計<sup>ル</sup>外商本利銀一千九百萬員。至<sup>レ</sup>嘉慶元年<sup>ニ</sup>。則六千七百萬員。其貨物不<sup>レ</sup>過<sup>キ</sup>魚油獸皮牛羊猪馬煙綿花五穀等ノ類<sup>ニ</sup>。工作<sup>ハ</sup>則有<sup>ニ</sup>鐵器磁器木器玻璃器<sup>ニ</sup>而已。國中関稅甚<sup>ッ</sup>少シ。無<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>入<sup>ル</sup>貨<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>貨<sup>ヲ</sup>。皆<sup>ナ</sup>無<sup>ニ</sup>重斂<sup>ニ</sup>。

和解本

亞墨利加合衆国ヨリ他国へ出テ交易スル<sup>ヲ</sup>其始ハ極テ少キ<sup>ヲ</sup>ナリシガ當時ニ至テハ甚盛<sup>ナ</sup>ナリ我カ寛政二年他国ニ於テ交易ノ利銀ヲ總計スルニ一千九百萬員ナリ同八年ニ至リテハ既ニ六千七百萬員ニ登レリ其交易ノ品ハ魚油<sup>イシロモノ</sup> 獸皮牛羊猪馬煙葉綿花<sup>タバコ</sup> 五穀等ノ類ニ過ズ其細工モノハ鐵器<sup>カナモノ</sup> 磁器<sup>キグ</sup> 木器<sup>キグ</sup> 玻璃器<sup>ワタ</sup>ノミニナリ。其國中ニ於テ年貢ノ収方甚少ク貨物ノ出入ニ差別ナク一々運上<sup>ヲ</sup>收納スル<sup>ヲ</sup>ハコレ無<sup>キ</sup>也

傍線部①、傍線部②の和刻本の原文とそれに対応する和解本の和解を並べてみると

①美理哥出<sup>テ</sup>商スル<sup>ニ</sup>外国<sup>ニ</sup>者

亞墨利加合衆国ヨリ他国へ出テ交易スル<sup>ヲ</sup>

②共<sup>ニ</sup>計<sup>ル</sup>外商本利銀

他国ニ於テ交易ノ利銀ヲ總計スルニ

①も②も原文がそれほど難解と言う訳ではないが、和解はいずれも文の意味が明瞭となっている。

他に、単語が当時の日本では難解な語、「関稅」、「重斂」をそれぞれ「年貢」、「運上<sup>ヲ</sup>收納すること」と少し意識ではあるが、和解している。また、和解でも、原文の語のままではあるが、「魚油」、「綿花」、「鐵器」、「磁器」、「木器」、「貨物」にその後の左側にカタカナで「ギョトウ（魚の脂肪で作った魚灯油。『日本国語大辞典』新訂版、以下同じ）」、「ワタ」、「カナモノ（金属製器具の総称）」、「ヤキモノ（陶器・磁器・土器など、土や石の粉末を焼いて作ったものの総称。）」、「キグ（檜（ひのき）の白木などで作った、漆を塗らない器物。）」、「シロモノ（売買する品物。商品）」とその意味が付けてある。それらと同じ場所にある和刻本の「煙」は和解本では「煙草」と和解され、その語の意味がその左側に「タバ

コ」とカタカナで付けてある。

以上、『亜墨利加総記』の和解について、その例に即して検討してきた。年号を中国のものから日本のものに換え、漢訳の地名、人名にはなるべく読みを付けた。それから、難解な語、当時一般的でない語は当時においてわかりやすい語に置き換え、また、難解な表現や、当時の一般的読者にとって読みにくい表現については、意識を含めてわかりやすい文に換えている。廣瀬竹庵の和解は、所謂漢文読み下し的なものではない。今日で言う翻訳に近いものと思われる。藤森大雅がその序で述べる「通暢平正、於当日事情炳然如觀火。雖武夫讀之、亦通曉」というのは決して単なる仲間褒めではない。既に鈴木俊幸が『江戸の読書熱』（平凡社 2001）で述べるように、江戸後期において、識字層が拡大し、彼らは読書を渴望していた。日本中に広がるナシヨナリズム高揚の時節柄もあり、この和解本『亜墨利加総記』はこの和解の仕方を見ても、多くの読者を持ったことは十分想像されるのである。

## 六 『亜墨利加総記』の影響

さて、これまで『亜墨利加総記』三編の内容、出版意図、和解の方法について、検討してきた。この書物の内容や和解の文章から見て、当時多くの読者を持ったことは想像に難くない。当時の人々がどのように読んだか、同時代人の日記、書簡を色々と調べてみたが、今のところそのような記録を見つけない。和刻本『海国図志』の方は、吉田松陰の『海国図志』受容を主なテーマとした『海国図志』と吉田松陰・幕末における西洋事情の受容について（『中国文化』70 2012）発表後、現在公刊されている、同時代人の日記、書簡を読み、それなりの数の記録は見つけることができ、中国で発表した「试论《海国图志》对近代东亚摄取海外情报的贡献」（『日本学研究』30 2019）に幾例か挙げた。

ここでは、私が発見した、同時代の『亜墨利加総記』に触れた記録とそれに関連した『海国図志』に

係わる記録を紹介する。

その記録は、幕府の奥医師を務めた坪井信良(1823～1904)が実兄佐渡三良(1820～1879)に送った書簡(宮地正人編『幕末維新風雲通信』東京大学出版会 1978)の中にある。書簡の日付順に並べることとする。

嘉永七年七月二十三日付書翰(前掲書P.86)

新板亜墨利加誌一冊拝呈候。

同年閏七月二十三日付書翰(P.89)

清人林則徐訳述海国図誌之内先アメリカ之部六冊上木出板、至極面白物ニ御座候御入用ナレハ御申遣可被下候。代料金式歩ニ御座候。

同年八月十七日付書翰(P.96)

アメリカ誌御礼傷入申候。今度続刻一冊上木ニ相成申候。後日指上可申候。

同年九月十日付書翰(P.96～97)

手代惣八ニハ海国図誌托上申候処、右之取込(惣八の急死)故、御入手之処定テ遅滞之事と奉

存候。アメリカ総記・医籍考等之御礼痛入申候。

加之御菓子料として金沓封御恵投被下、不存寄ル義忝奉拝受候。今便アメリカ続記二冊拝呈仕候。

御笑留可被下候。右ハ皆海国図志中之拔萃ニ御座候故、全書上木之上ニテハ不珍之事ニ御座候。扱亦海国図志ハ全部六十巻物也。右之内先日上木之アメリカ之部ハ林塾川田生之句読ニ御座候。今般又別ニ本書之順之通りニ川路之世話ニテ塩谷甲蔵之句読、地名等ハ箕作元甫之書入ニテ、近刻ニ相成可申趣ニ御座候。漢土ニテも無比之要書と奉存候。過日鳥渡甲蔵方ニテ本書之目録ヲ一見仕リ、実ニ全完備之大著述、当今軔要之急務ト奉存候  
十月四日付書翰(P.98)

ここに引用した坪井信良が実兄佐渡三良に宛てた書簡には、坪井信良が福井藩藩医、後に幕府の奥医師とであった関係で得た、当時の貴重な情報や当時話題となった書物の情報も満載されている。また、信良が兄に話題となった書物を送った記録でもある。



幕末研究には必須の資料であり、また当時の書物についての情報を得るためにも貴重な資料である。今回筆者が発見したように、『亜墨利加総記』の情報も記載されていた。

この書簡に載っているこの書物の情報は、傍線部四カ所である。七月二十三日付書簡には「新板亜墨利加誌一冊」即ち『墨利加総記』を兄に手紙とともに送るといふ記載があり、八月十七日付書簡には、それに対する兄の礼状に対する坪井のお礼と、「続刻一冊」即ち『続亜墨利加総記』が刊行されるから、必要なら送るといふ記載がある。九月十日付書簡には、『アメリカ総記（亜墨利加総記）』に対する兄の礼状と、兄からの菓子料へのお礼、『続亜墨利加総記』を兄に手紙とともに送る旨の記載とともに、『和刻本 墨利加洲部』が出版されるとこの書物は抜粋なので珍しくもないというコメントもある。併せて『海国図志』に対する「漢土ニテモ無比之要書」、「実ニ全完備之大著述」、「当今要之急務」という高い評価も記載されている。坪井にとつて、『亜墨利

加総記』は『海国図志』の和刻本に比べれば、珍しくもないものかもしれないが、兄に送るぐらいだから、価値がない訳でないというところであろう。

今後とも、同時代の日記、書簡、随筆を読み、『亜墨利加総記』についての情報を探すことに努め、同書受容を考える手がかりとしたい。

## 七 結び

さて、本稿では『亜墨利加総記』三篇の内容、作者の出版意図、和解の手法について、考察してきた。この書物は、幕末の対外的危機感を契機として発生したナショナリズムを背景として生まれた、アメリカ事情についての簡にして要を得た書物であること、その和解は幅広い読者を期待した、今日で言う、翻訳というべきものであることがわかった。

和刻本は幕府高官の川路聖謨なり、豪農の中山伝右衛門なりの後援がある。それに対して、和解本の作者は無名か、無名に近い人々である。彼らは、そ

れなりの経費を必要とする和解本作成という事業を単に個人で行ったのか、その背後には、同じ志、所謂「攘夷」の志を持つ人々の協力乃至支援があったのではないかと私は推察している。この書物の序や跋を書いた、藤森大雅、横山湖山からたぐっていえば、手掛かりが見つかるかもしれない。このことは今後の課題としたい。

注

- (1) 鮎沢信太郎著「世界地理の部 四 幕末開国期に伝来した唐本世界地理書の翻刻と邦訳」(『鎖国時代日本人の海外知識』(復刻版原書房 1978) 所収) P.138～139、源了圓「幕末・維新时期における『海国図志』の受容——佐久間象山を中心として」(『日本研究』9 1993) P.13～14、宮地正人「幕末・明治前期における歴史認識の構造」(『歴史認識 日 本近代思想大系』、岩波書店、1991) P.514～516、P.521。
- (2) 大庭脩『漢籍輸入の文化史』(研文出版、1997) P.326。
- (3) 阿川修三『海国図志』と日本 その2—和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図』(『言語と文化』24 2012) P.29。
- (4) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学出版部 1967) 第5章「御役人様方御調書」等に関する考察」P.195～197、同『漢籍輸入の文化史』(研文出版 1997) 第11章「開国と輸入書」P.329～331。
- (5) 和刻本『海国図志 籌海編 一上』の扉に第二版を示す「道光己酉夏古微堂重訂」とあり、その中にある「海国図志総目」は全60巻である。
- (6) 川路寛堂『川路聖謨之生涯』(吉川弘文館 1903) P.350～351、川田貞夫『川路聖謨』(『人物叢書』、吉川弘文館 1999) P.226～227。
- (7) 宮地正人編『幕末維新風雲通信』(東京大学出

- 版会 1978) P.97。
- (8) 『国史大辞典』(吉川弘文館)の「河田迪齋」の項。
- (9) 佐藤至子『江戸の出版統制(歴史文化ライブラリ 456)』(吉川弘文館 2017)「天保の改革と人情本・合巻(天保の改革と出版業界)」によれば、江戸時代、従来本屋の株仲間出版物の発行の可否は任されていたが、天保の改革で、株仲間が解散させられると、出版業者は町名主館市右衛門を通して奉行所に出版の申請をし、それを学問所が吟味して最終的には奉行所がその出版の可否を判断するシステムに変わった。この書類が『市中取締続類集』『書籍之部』(国立国会図書館所蔵)として残っており、その書類によりその書籍の申請時期、出版許可の時期が分かるのである。
- (10) 『美理哥合省国史略』は、裨治文『聯邦志略』(南方日報出版社 2018)所収のものに基づく。和解本『海国図志籌海篇訳解』の作成者南洋
- (11) 梯謙の自序にも「其所記載之籌海篇…此天下武夫必読之書也。当博施以為国家之用。此訳所由起解之拳。抑欲施之水手輩。非供高明君子之覽。」とあり、同様の問題意識を持つていた。
- (12) 松本三之介『近代日本の中国認識』(以文社 2011)「第一章「中華」帝国と「皇国」」II、III、IV、V。平石直昭『改訂版日本政治思想史—近世を中心に』(放送大学教育振興会 2001)「12 西洋像の変遷」。渡辺浩『日本政治思想史』(東京大学出版会 2010)「第十七章「西洋とは何か」」。
- (13) 佐渡養順に坪井信良から送られた書籍は現在金沢市立図書館に蒼龍館文庫として保存されている。その目録を見ると、この「新板亜墨利加誌一冊」に当たるものは『亜墨利加誌』しか存在しない。
- (14) 蒼龍館文庫の目録には、「続刻一冊」に当たるものは『続亜墨利加誌』しか存在しない。

『海国図志』の和解本『亜墨利加総記』  
正編、続編、後編について

阿川 修三

Concerning the “**亜墨利加総記 (Amerikasōki)**”

Shuzo Agawa

"海国図志 (Haiguotuzhi)" played a major role in spreading knowledge about overseas circumstances at the end of the Edo period. However, what I actually read was a 和刻本(Wakokubon), which was published with some lessons, and a 和解本(Wagebon), which was translated and published. In this paper I discuss the contents of "亜墨利加総記 (Amerikasōki)", which is a translation of the part about the United States, the reason for its inclusion, and the translation method. Contents are about America in general, from its history to nature, industry, politics, society, and the geography of each state. The point of publication was to make a wide range of people understand the situation in the United States and to counter its threats. The translation could be understood by those whose level of literacy was limited. It is thought that it was read by a wide public and was very useful for learning about American circumstances.